

# 証券会社と考える、 資金の「寝かせ方」

## 住

宅ローン金利の「1%のせ」が話題となっている。2026年4月から、大手都市銀行5行の変動型住宅ローンの最優遇金利の平均は1%を超えた。0.5%を切る水準が見られた5年前とはまるで違う世界になっている。

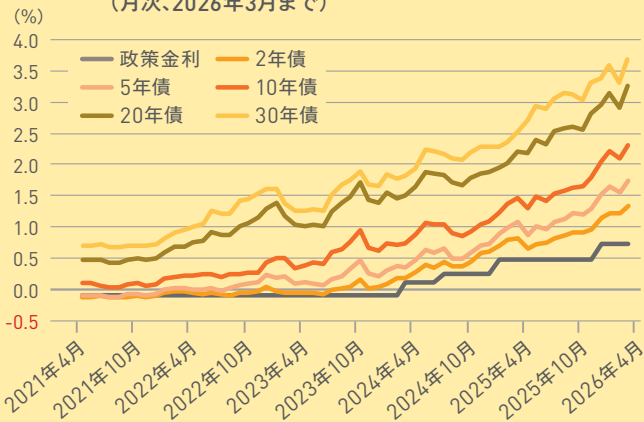
日本銀行がマイナス金利政策を解除したのは2024年。政策金利はその後2年間で徐々に切り上げられ、2026年3月の金融政策決定会合では、0.75%での据え置きを決定した。国債の利回りも上昇基調となっている。政策金利の上昇に加えて、将来の財政やインフレに対する懸念、国債の取引市場における需給、海外金利の情勢なども重なり、特に10年を超える長期から超長期ゾーンの金利上昇が目立つ。住宅ローンもこうした金利上昇と無関係ではない。

一方、2026年のマーケットはイラン攻撃による原油市場の動揺、景気減速懸念など不透明要因が多く、波乱含みの展開だ。乱高下する市場を前に、「寝かせておいても金利が付くし…」と様子見姿勢を取る投資家も少なくない。

ただし、物価上昇による資金の目減りを防ぐためには、寝かせ方にも工夫が必要ではないだろうか。安定志向といっても、預金、国債、MRFでは金利水準や流動性、仕組みも異なり、その差は意外と大きい。こういった資金の置き場所の選び方も重要だ。証券会社は、株式をはじめとするリスク商品の専門家という印象が強いかもしれないが、低リスク商品も幅広く扱っている。資金の置き場所を一緒に考える先としても有用だ。一度相談してみてはどうだろうか。

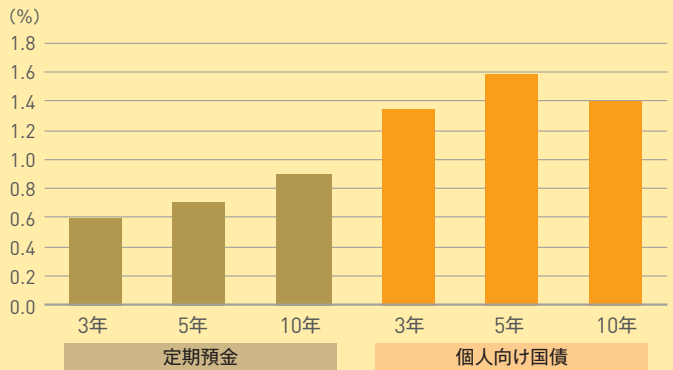


■ 図表1 日本の政策金利と国債利回りの推移  
(月次、2026年3月まで)



(出所) QUICKのデータをもとに当社作成

■ 図表2 個人向け国債と定期預金の利率



※定期預金は4月1日時点の大手都市銀行の平均、個人向け国債は3月募集債の利率。個人向け国債10年は、変動金利型で当初半年間の利率。いずれも税金は考慮していません。

(出所) QUICK、財務省ホームページ等をもとに当社作成

## 資産運用に、短期債券という選択を。

当社で取り扱うのは、リスクの高い商品だけではありません。  
お客さまが許容できるリスクの範囲内でリターンが期待できる運用として、  
「金利のある世界」において魅力が高まる、国内公社債等を中心とした投資信託をご提案します。

**三菱UFJ 日本短期債券オープン**  
〈愛称:円債ファースト〉

追加型投信 / 国内 / 債券

**三菱UFJ マネー・ファンド**  
(毎月決算型)

追加型投信 / 国内 / 債券

商品のお申込みにあたっては目論見書等を必ずご確認ください。目論見書等のご請求はお取引店までどうぞ。